第11回みんゆう新聞感想文コンクール作品紹介

生きた教材で表現力学ぶ

「第11回みんゆう新聞感想文コンクール」は小学3・4年生の部から高校生の部まで4部門に、県内58校から1215点の作品が寄せられ、審査の結果、各部門でそれぞれ最優秀賞1点、優秀賞3点、入選5点の入賞作品と学校賞の3校が決まった。このうち最優秀賞、優秀賞に輝いた16作品を紹介する。【審査結果は11月11日付1、23面に掲載。入賞者の敬称は略】

コンクールは、児童生徒の「感想」をテーマに、福島民友をはじめ日刊紙の一般記事や社説、コラム、連載企画、こども新聞などを読んで感動したこと、興味を持ったことについて作品を募集した。

「新聞掲載記事を読んで」の広い視野と豊かな心を育む生きた教材として新聞を活用し、確かな表現力を身に付けてもらうため、福島民友新聞社が実施している。

福島地区中学校教育研究会国語部長の矢吹賀道・福島市立信陵中学校教頭を審査長に、厳正な審査が行われた。審査員は次の通り。

審査長＝矢吹賀道（信陵中教頭）▽副審査長＝高橋健一（平野小校長）▽審査員＝梅野克也（県教育庁高校教育課指導主事）佐藤尚美（北信中教諭）野口有美（平野中教諭）大波陽子（桃陵中教諭）菅野恵美（月舘学園中教諭）渡部志乃（二本松三中教諭）蓬田恵美子（安達中教諭）渋谷朋子（蓬莱東小教諭）佐藤和子（大田小教諭）野村博子（二本松北小教諭）小野広司（福島民友新聞社執行役員編集局長）

各部門の入賞者

◇小学３・４年生の部◇
◆最優秀賞
菅沢恵介（二本松南４年）
◆優秀賞
山野井勇介（八幡４年）
三沢明夏（桜の聖母４年）
浅和晋悟（大山４年）
◆入選
渡辺愛咲（桜の聖母４年）
斎藤圭（福島大付４年）
西牧照（福島大付３年）
堀内輝羅斗（飯豊３年）
伊藤愛（磐崎３年）

◇小学５・６年生の部◇
◆最優秀賞
平塚燈真（小金井６年）
◆優秀賞
大橋明莉（柏城６年）
小関春陽（関柴６年）
須藤由衣（玉川一６年）
◆入選
小山賢士（三春６年）
小林優斗（玉川一６年）
坂内優成（大島６年）
亀山匠（大島５年）
鈴木智陽（上遠野５年）

◇中学生の部◇
◆最優秀賞
岡部明希（野田３年）
◆優秀賞
鈴木ゆわ（中央台南３年）
小林里緒（郡山三２年）
浜崎凌（信陵１年）
◆入選
高平碧夢（石神３年）
石川朱璃（石神３年）
渡辺和泉（二本松一３年）
亀山ひかり（郡山五２年）
人見太陽（北信１年）

◇高校生の部◇
◆最優秀賞
渡辺弥生（福島３年）
◆優秀賞
高原かえで（福島商２年）
二階堂伊織（福島商２年）
緑川知紗（学法石川１年）
◆入選
大室慶弥（福島商２年）
菅野凪沙（福島商２年）
桑島羅魅（福島商２年）
藤田紗也香（福島商２年）
橘結花（安達東１年）

◇学校賞◇
玉川一小、石神中、福島商高

審査長講評

福島地区中学校教育研究会国語部長
矢吹　賀道さん
（福島市立信陵中学校教頭）

本年度は、新型コロナウイルス感染症対策に係る臨時休業などの影響もあったためか、小・中・高合わせて昨年度よりも15校減の58校からの応募となりました。しかしながら、応募総数は186点増の1215点の作品が寄せられ、本コンクールに対する意欲の高まりを感じるところです。

さて、小学3・4年生部門では、終戦記念に関する内容や洪水などの自然災害、ごみなどの環境問題と、多種多様な題材に視野を広げ、自分を取り巻く社会に興味・関心が高まっている姿がうかがえました。外出ができない日々の中で、家族と記事の内容を話題にして意見を交わし、共有するという、一家だんらんの光景が目に浮かびました。

小学5・6年生部門では、悪化する自然環境への取り組みや福島県の良さに目を向けた作品が多く見られました。記事と自分自身の体験を比較し、課題やその理由、さらには課題に対する改善策について家族と話し合ったり、インターネットで調べたりと、身の回りのことから社会事象へと追究する姿が見られました。

中学生部門では、今までに見られた戦争や平和に関すること、スポーツ、震災、環境問題などに加え、コロナ禍・戦後75年関連とどまらず、さらに多岐にわたっており、多様な時事に興味・関心を持ち、追究し、自己の考えを深める作品が多く見られました。記事の内容と自分の考えを比較し、物事を多面的に捉え、批評的な読みにつなげているところに、高校生ならではの成長を感じました。

今後の課題としては、記事の引用が多すぎたり、反対に記事の要約のみとなったりしないこと、さらには作品全体の構成を見直し、読み手にとって読みやすく、心に響く言葉選びを心掛けてほしいと思います。

一つの記事から思いや疑問が生まれ、そこからさらに情報を求め、課題を追究し、結果自分がその記事に出会う前と後で、どのように「変容」したのか、が大切ですし、その「変容」こそが書き手の「成長」であるとも考えます。来年度も、小・中・高校生の「成長」を感じさせる作品が多数応募されることを期待いたします。

4部門の最優秀賞

小学3・4年生の部

「沖縄戦75年、不戦のちかい」を読んで

二本松南小4年　菅沢（すがさわ）　恵介（けいすけ）

ぼくは、6月23日に沖縄県で行われた沖縄戦でなくなった人をいたむ、戦ぼつ者追とう式の記事を読んで感じたことを書きたいと思います。

ぼくが一番心にのこったことは、追とう式で読まれた高校生の平和の詩「あなたがあの時」です。この詩は、実さいに多くの人々がにげこんだごうの中で、感じたことを詩にしたものです。ぼくは、この詩の全文が読みたくなって調べて読んでみました。

この詩を読んで「生きていてくれてありがとう、命をつないでくれてありがとう。だから今、わたしがここにいる。」という言葉にむねがいっぱいになりました。

沖縄戦というのは、地上戦が行われ、住民たちも、空や海からりく上でも、じゅうや大ほうのこうげきにまきこまれていたそうです。

ぼくが、戦争ってざんこくだなと思うのは、多くの人が生きることをあきらめてしまうということです。

戦争というのは、家族やすむ家をなくしたり、食べ物もなくなり、心も体もボロボロになってしまいます。また、学校で友達と学んだり、遊んだりすることもできなくなってしまいます。でも、そんな中で生きることを、あきらめなかった人もたくさんいました。

ぼくも、そんな人たちに「ありがとう」と言いたいです。なぜならば、ぼくの命も苦ろうして生きてきた先そとつながっていて、今ぼくがここにいるからです。そう考えると、命というのはかちがあるな、大切にしなければと思います。

だから、つみのない人がころされたり、たくさんの人がつらい思いをする戦争はやめてほしいと思います。

今、ぼく達ができることは、戦争の事実を知り、後の世代に伝えていくことです。そして、平和な世界で命をつないでいきたいです。

小学5・6年生の部

石炭火力発電所を減らすうえで

小金井小6年　平塚（ひらつか）　燈真（とうま）

僕がこの記事を読み終えて、最初に思ったことは「原子力発電の力も借りる必要があるのでは」です。石炭火力発電所を休廃止する事によってCO_2の排出量を減らすことができるのならば、今、世界で深刻な問題となっている、地球温暖化への対策の一つとしてとても有効だと思います。しかし、それと同時に「休廃止することによって、電力が不足してしまわないのだろうか」という疑問も生まれて、最初に思ったことは「原子力発電の力も借りる必要があるのでは」です。石炭火力発電所を休廃止する事によってCO_2の排出量を減らすことができるのならば、今、世界で深刻な問題となっている、地球温暖化への対策の一つとしてとても有効だと思います。しかし、それと同時に「休廃止することによって、電力が不足してしまわないのだろうか」という疑問も生まれました。政府が推進している再生可能エネルギーについて調べてみたのですが、天候に左右されやすく、安定した電力を確保する事が出来ないため、原子力発電の力も借りるしかないのではという結論に至ったのです。

その一方で、福島第一原子力発電所事故の影響で「原子力発電所を再稼働するのは危険なのではないか」という考えを持つ人も沢山いると思います。正直、僕にも不安な気持ちはありますし、被災した友達のことを考えると胸が痛みます。しかし、地震や津波、それ以外の災害などをいくつも想定して十分な安全対策をすれば、CO_2を排出しない原子力発電で電力を補うことも可能なのではないのでしょうか。

石炭火力発電所は、最終的には全て廃止する事も考えなければならない時が来るかもしれません。しかし、石炭火力発電所を廃止した時に、代わりの電力を何で補うのか考える事がとても重要です。安全かつ確実にライフラインを守れる様に、国民と政府と電力会社などが協力して、これからの日本の電力を考えながら作っていくべきだと思います。

そして何よりも大事なことは、国民一人一人が積極的に「節電」を心がけることではないでしょうか。僕は、それこそが一番の地球温暖化防止対策になると思います。

中学生の部

自分の身になって考える

野田中3年　岡部（おかべ）　明希（あき）

新聞を見ていて、ある記事に目がとまった。県内の感染者が出た居酒屋。すぐにぴんときた。症状が出てからも職場に行き、他の二人にも感染させた。その報道を見た時私は、なぜこのコロナ禍の中で体調が悪いのに出勤してしまったのか、と怒りを感じた。しかし、その居酒屋が差別や誹謗中傷を受けていると記事で知り、すぐにその居酒屋を応援したい、という気持ちになった。SNSでその店を非難し、デマを流した人達はなんてひどいんだ、とも思った。私は絶対に、そんなむやみに人を差別する人にはならない、そう思っていた。

現代では、大半の人が「差別はダメ」という認識を持っている。しかし差別をする人は依然多い。なぜだろう。ふと思い出した。

私の町でも感染者が出たことがある。家から見えるくらい近くにある会社で、一人の感染が判明した。それを聞いて私はとっさに、「○○か、同級生のお父さんとか働いてそうだから、同級生がなってたら怖いな。」と思っていた。これは差別だ。無意識のうちに、私は疑う必要のないものを疑ってしまった。そう思うと、居酒屋の感染者についても、私は差別していた。感染した方達の事情も性格も何も私は知らないのにも関わらず。私も、「差別はダメ」と認識してはいても、差別をする者の一人だった。

一方で私は、常に差別の被害者にもなりうる。私は福島出身ということを誇りに思っているが、将来県外へ出た時、「あぁ、原発のね…。」とマイナスに捉えられることがあるかもしれない。また、二年前に私が東京へ旅行へ行った時、街角で、こう訴えている都内の学生さん達がいた。「福島の人々は皆、今も原発に生活を苦しめられ続けている。フクシマを忘れるな。」それも一つの事実だろう。しかし私は、言いようのない違和感を覚えた。一人一人の人生が、「福島の人々」と一方的にまとめられたような気がした。

誰かを守ろうとすることと差別は、紙一重だ。いわゆる自粛警察と呼ばれる人達も、「感染者を増やしたくない」という正義がふくらみすぎた結果だ。記事で、被害を受けた店の社長は「自分の身になって考えてほしい。」と語っている。私の人々は皆、今も原発に生活を苦しめられ続けている。フクシマを忘れるな。」それも一つの事実だろう。しかし私は、言いようのない違和感を覚えた。一人一人の人生が、「福島の人々」と一方的にまとめられたような気がした。

誰かを守ろうとすることと差別は、紙一重だ。いわゆる自粛警察と呼ばれる人達も、「感染者を増やしたくない」という正義がふくらみすぎた結果だ。記事で、被害を受けた店の社長は「自分の身になって考えてほしい。」と語っている。私は、自分が差別の加害者にも被害者にもなりうることを、二つの経験を通して身をもって実感した。だからこそ、改めて、「差別はダメ」だと思う。これからも、無意識のうちに私の目には、色メガネをかけた、既にグループ分けがされた世界が映るだろう。しかし、そんな時もまた、視点を増やし、どの立場も自分の身となって考えることで、それに自ら気づけるようにしたい。私は差別をする人にはならないと思うだけではなく、意思を持って差別をしない人になりたい。

高校生の部

「距離感」を超えて

福島高3年　渡辺（わたなべ）　弥生（やよい）

今年、新聞には猛威を振るう新型コロナウイルスについての記事があふれていた。連日の暗いニュースの中、ある日開いた新聞の記事に、ふと目が引きつけられた。

「『新しい生活様式』動物学者はどう見る」。そう題された記事は、動物学者である上野吉一さんが新型コロナウイルスの感染拡大を防ぐため発表された「新しい行動様式」について、認知行動学の観点から検証しているものだった。上野さんによると、相手に近づかない・食事中会話をしない・マスクを着用するといった「新しい生活様式」は、ホモ・サピエンスである私達にとっては本来の性質に反する不自然な行動なのだそうだ。相手に対する「距離感」は心とつながっているため、身体的な距離はそのまま相手との心の距離となってしまう。生活において「新しい生活様式」を実践している自分の身を振り返り、そのことを改めて強く感じた。身体的な距離は変わろうとも、これまで築いてきた相手との関係性は変わることはない。そう信じてもどこか拭いきれない不安感に、説明を与えてもらったと感じた。

上野さんの記事の中で更に興味深かったことは、料理をふるまい共に食べるという行為は極めて人間的であり、その行為によって人類の食文化は発展してきた、ということだ。サルは親子間でも食べ物の積極的分配はせず、食事を積極的に分配し社会的に食べるのは人間だけなのだそうだ。普段何気なく過ごす食事の時間が、人間の食文化史上それほど大きな意味を持っているとは考えもしなかった。同じ食事を分け合い会話を交わすことで、大昔から人類はコミュニケーションを図ってきたのだろう。その営みが脈々と自分に受け継がれていることを感じるとともに、もう何か月も親戚や友人とは食事を共にしていないことを淋しく思った。

上野さんはマスクで覆い隠される口元も表現の道具であり、ヒトの表情筋は特に発達しているとも述べている。ということは新型コロナウイルスにより、保つことを余儀なくされた「新しい生活様式」とは、遥か昔の祖先以来のコミュニケーション方法を一変させる転機となるものであるだろう。これまでの伝統的な意思疎通の方法が成り立たない今、そして未来、人類はどうなっていくのだろうか。私自身、これから多くの人々と出会う人生の中で、どのように新たな関係性をいちから築けばよいのか摑みかねている。しかし最も重要なことは、相手との意思疎通が難しいという状況を双方が理解し合い、お互いに歩み寄ることだろう。縮まらない心の距離は、これまで以上のお互いへの心遣いとことばが縮めてくれるはずだ。人間の新たな発展の仕方を共に模索し、切り拓いていくときだと思う。